

エリトリア便り No.3

雨期は終わり、すっかり乾季となりました。エリトリアでは乾季になっても紅海を挟んだ対岸のイエメンでは大雨による洪水被害が報告されております。アスマラ市内では夕方になると遠くの空にて雷が光っているのを見受けましたが、首都では雨は降らなくなっていました。アスマラ郊外へ毎週日曜日に行っているハイキングでも、草たちは乾ききってカラカラになっています。

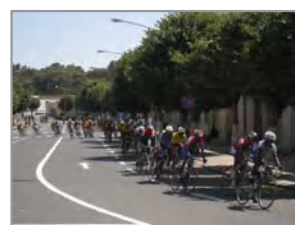


乾いた郊外の野原

今年の雨期は例年に比べて雨が少なかったと聞きます。作物の生育状況が気になります。

1. 自転車大国エリトリア

TICAD 開催前に横浜の倉庫街にて「アフリカンフェスタ」が開催されたのは記憶に新しいと思います。多くのアフリカ各国に混ざってエリトリアも小さいながらもブースを出しておりました。エリトリアの情報を事前に Internet 等でも集めることはなかなか難しく、“少しでも情報を得られれば”と思ってエリトリアブースを訪ねていました。知名度の高い国の多くは、民芸品を販売し



疾走する選手達

たり、現地にて活動している NGO、NPO がブースを出したりと活気がありました。そんな活気のあるブースに挟まれて、エリトリアブースは大変小さく、イタリア統治時代に建てられた建造物の写真集と、昨年行われた日本人有志と、エリトリア政府観光省等が主催する『日本エリトリア親善サイクリング』の模様のみと展示物も限られておりました。担当の方から簡単にエリトリアの説明を受けたとき「エリトリアはアフリカで一番の自転車大国ですよ」と言います。しかし一般的に『自転車大国＝中国』というイメージが強いのではないのでしょうか？中国のように自転車が走り回っている写真などを見ることが出来れば納得したかもしれませんが、“自転車大国”ということに疑問を持ちつつ赴任しました。

中国と比較しては酷ですが、エリトリアでの生活を通して感じた印象として、やはり自転車大国のようです。町のあちこちに自転車店を見掛けます。実際、街中でも車の台数に匹敵するくらいの自転車を見掛けます。極めつけは毎週末に開催されている自転車レースでしょうか。市内でレースを毎週末のように開催しています。幾つかのクラスに別れているらしく、クラスによって参加している自転車に差がありました。トップクラスともなれば、写真のように立派な自転車にてレースをしています。しかも街中をかなりのスピードで疾走しています。



交差点も疾走！

自転車の選手になるのはエリトリアでは憧れらしく、“羨望の眼差し”にて自転車や選手を見ています。レース用自転車に乗れるような選手は、どうやら優遇されているらしく、平日でも私の出勤中にレースをする格好にて自転車に跨っている姿を見掛けます。

2. 虫垂炎（盲腸炎）にてセンベル（Sembel）病院へ入院・手術

途上国では頻繁に経験するお腹の不調。今回も“ああ、なんか悪い物食べたかな～”等と悠長に思っておりました。しかし、2日経っても痛みがひくどころか、むしろ激しくなっています。どうした訳か今回は“これ位の痛みで泣き言を言っているのはダメだ!!”と自身を奮い立たせ、我慢を決め込みました。しかし、何か食べると痛みはより一層激しくなります。仕方なく職場へ電話をして助けに来てもらいました。来てくれた同僚は前日にも職場内の医療施設へ私が来ていたのを知っているのだから「これはただ事ではない！」と直ぐに病院へ受け入れ準備を整えてもらうべく連絡をしてくれました。



入院中の私

当初は病院の先生も「順番抜かしをして診察なんて、なんて失礼なヤツなんだ！」と言っていたそうですが私の容体を見て一転します。『事の一刻を争う事態!』と判断した先生は「お金を払って無かろうが関係ない！私が責任を取るから必要な検査を全てしなさい！」と指示をして下さいました。病院へ着いた時間が遅かったにも関わらず、多くの必要な検査を受けて、そのまま“緊急入院”となりました。

翌朝一番に血液検査を行い、検査の結果が夕方に出ました。「虫垂炎だよ。しかも発症から24時間以上*経っているだろう？緊急手術が必要だ」と先生は言い出します。朦朧とした意識の中で“日本帰国&手術”願望が続いていたのですが、どうやら事態は私が考えている以上に深刻で、その晩には“緊急手術”を受けました。

入院中は点滴のスピードがバラバラで、24時近くになって注射を打ちに来たり、ナースコールを押してやっところ来てくれたと思っても、何も言わずに出て行ってしまいます。不安を掻き立てることばかり起きます。全てが看護師さんの都合が優先の様でした。そんな入院生活で思ったのは「自分の命は自分で守らねば!」「ホスピス精神は重要だ!」でした。



Ugandaの協力隊員

こんな環境ではUganda M barara病院にて目の当たりにした協力隊員に看護されている患者さんの様な表情にはなれません。その一方で、数々の英断をしてくれた先生。当直でない日に緊急手術をしてくれた執刀医。日本語でも正常に判断が出来ない時、英語で説明する先生との間に入って手術実施是非の判断を助けてくれた日本人の方々。色々な方に助けられてエリトリアでの手術・入院生活を乗り切りました。その一方で弱り切った身体と、入院中にすっかり止まって溜まった私の仕事。職場復帰後が恐ろしいです。

国連人口基金エリトリア事務所
情報ネットワークオフィサー
瀬畑陽介

* 発症から24時間以上経つと、腹膜炎になる恐れがある